

メンガー文庫と一橋大学

The Carl Menger Library and Hitotsubashi University

メンガーが残した私蔵書

メンガー文庫は「世界の学界の至宝である」と目録(1955年)の序で述べられているように、この文庫は本学にとって現在最も重要なコレクションの一つとなっている。メンガーは学者であると同時に大変な書籍収集家でもあり、その2万冊にもおよぶコレクションは第一級の私蔵書としてつとに知られていた。この大文庫が海を越えて日本へと渡ったのは、メンガーの死後、当時ベルリンに滞在していた東京商科大学（現在の一橋大学）教員の大塚金之助が、文庫の購入を図書館長の三浦新七にはかったことが発端であった。メンガーの蔵書は、本人が生前に約15万フランで



メンガー宅の本棚。大塚らが撮影したと思われる。

売ろうと伝えていたが、彼の死後その指示に従って、メンガー夫人が売却先の選定を行っていた。大塚らは貴重な本の抜きとりが無いように、古本屋を介さず、直接メンガー夫人と交渉にあたった。当時学長であった佐野善作は蔵書の購入について「メンガー文庫非常によければ苦面しても買ひたし」と大塚らに電報を打ち、その交渉を後押ししている。

困難な交渉を経て一橋へ

ウィーン大学などいくつかの大学が競争者となったが、第一次大戦後の混乱が続いていたヨーロッパの大学を避け、アメリカか日本へ売却することを望んでいた夫人の意向もあり、東京商科大学が3万ドルで購入することとなった。当時オーストリアではインフレが急速に進んでおり、また多額の現金取引については当局から没収を受ける可能性もあったため、取引場所や送金方法は

大学との間で何度も検討された。また、オーストリアには財産の国外持ち出しを禁止する法律があったため、文庫を日本公使館の所有物として船便で日本の外務省宛てに送る手段がとられた。木箱に詰められた文庫がウィーンからハンブルグを経てすべて船積みを終えたとき、担当者たちはようやく安心してよろこび合ったという。

震災や戦火を逃れたメンガー文庫

こうした紆余曲折を経て、日本にたどり着いたメンガーの蔵書は、到着後暫くして関東大震災に見舞われた。文庫は整理前の状態ですべて一ツ橋の三井ホールに保管されていたが、幸い火災などの難を逃れ無傷で残った。第二次世界大戦中は軍部に敷地を接収され大学も敵機の攻撃対象となったため、メンガー文庫を初め学内の貴重書は長野県に疎開させられた。この時も幸い文庫は一冊も欠けることなく大学に戻り、現在に至るまでウィーンを旅立った当時の姿を保っているのである。



メンガー夫人と大塚金之助ら。
『Hitotsubashi in Pictures : 1950』
(1951年より)